

■ 2009年度 入試問題分析シート ■

東京大学

前期日程

科目

国語(古文)

文科	試験時間	150分	満点(配点)	120点	出題数	現代文 2題、古文 1題、漢文 1題			
理科	試験時間	100分	満点(配点)	80点	出題数	現代文 1題、古文 1題、漢文 1題			
総括					難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化	
					分量(昨年比)	増加	昨年並	減少	

〈総論〉

本文は理文共通で、約800字。昨年度より200字程度短くなった。人物関係やその心情を考察しつつ読解することになるので、本文そのものは昨年度よりやや読みづらい。

理科の設問は枝問数は5、文科の設問は理科の枝問をそのまま用いた上に、さらに2つの枝問を付加して、合計7。枝問数は、理文ともに昨年度と同じ。現代語訳と説明問題の二種類の設問形式で構成されている点も、例年と変わらない。

〈合格への学習対策〉

基本的な語彙や文法事項を身につけた上で、文章全体の展開を考慮しながらじっくり読み解く読解力が求められる。さらに、設問が指示するかたちで解答を作成する工夫が必要である。

問題分析(本文)

問題番号	類別(ジャンル)	出典(著者)	コメント(特徴・出題頻度など)	本文のレベル
第二問	物語	『うつほ物語』 (10世紀後半に成立。作者は未詳)	『うつほ物語』からの出題は、『源氏物語』ほど頻度が高いとは言えず、近年の主要大学の入試では、本年度の早稲田大学商学部などに採られた程度である。今回の問題文も、多くの受験生にとっては見なれたものではないだろう。	標準

設問分析

問題番号	設問番号	設問形式	設問内容(特徴・解答上のポイントなど)	設問のレベル
第二問	文科(一) 理科(一)	記述	現代語訳の設問で、基本的な語彙力を問うている。言葉を補ったかたちの現代語訳の設問が他にあるので、この設問では、原文の語彙を生かした訳出が望ましい。文科(オ)・理科(エ)の「あだなれ」は、訳出に工夫が必要。	やや易
	文科(二)	記述	具体的な内容を明確にしてうえでの現代語訳。「こよなく」の内容を踏み込んで訳すことが求められる。	標準
	文科(三) 理科(二)	記述	傍線部の表現内容を説明する問題。登場人物の心理に即した説明が求められる。	標準
	文科(四)	記述	具体的な状況がわかるように言葉を補ったうえでの現代語訳。人物関係を正確に把握した上で、その心情を考察しなければならない。	標準
	文科(五) 理科(三)	記述	具題的な内容を明確にしてうえでの現代語訳。人物関係を補って訳すことが求められる。「われ」の訳出に工夫が必要である。	標準

「本文のレベル」と「設問のレベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。